

キリスト道講演会 (奈良 第2回)

「神の思い」と「人の思い」(二) ——真に豊かな人生への道

2010年1月31日 (奈良 春日野荘)

奥田 昌道

国籍は天国、地上へ出張 聖霊による新生 五つのパンと二匹の魚 神さまの贈り物 キリスト
受難の秘義 キリストを受け入れて天国へ行く 神の求め給うもの 天に宝を積む 癒されて旅
立ちたい 孫の旅立ち 失われた神の子 万のことに時あり 山上の説教 キリストとの直結関
係 祈り

●国籍は天国、地上へ出張

皆さん、よくおいでくださいました。皆さんにご案内してあるチラシの「講師の言葉」の中に、

《「わたし⁸の思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる」(イザヤ55・8)

「主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。……¹¹天が地を
超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。……¹³父がその子
を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる」(詩篇103・8〜13)

旧約聖書の預言書や詩篇において、すでにこのように神の愛の思いが語られています。新約聖書のキリストにおいては、深い愛の心が、その言葉と業に溢れています。わたしたちは、その神髄に触れることなく、神の言葉、キリストの言葉やみ業を素通りしてしまっているのではないのでしょうか。この講演会を通して、ほんものに触れていただきたいと願います。》

とあります。なかなか人の思いというのは、神さまの思いとはかけ離れている。神さまの方から、こんなご馳走を、大事なものを差し出しておられるのに、人はそれに気づかない。

「何だ、キリスト教か、もういいよ」
と、そのくらいのごことで終わっているのが一般の方ではないでしょうか。

「日本は仏教国、いや、日本は神の国だ。そんなヨーロッパから流れてくるようなものは結構だ」

と。グローバル化時代とか、宇宙時代とか言いながら、ちょっと狭いのではないのでしょうか。日本人もたくさん宇宙へ行って来られました。向こうから還ってこられたら、

「いやあ、向こうは凄かったよ。向こうから見たら、やはり地球というのは可愛い、美しいんだよな」



と、いろいろなことを報告してくださいませ。皆さんはそれをすんなり受け入れていらつしやるでしょ。宇宙ステーションにはロシア人もおれば、アメリカ人も乗っています。みんな国際協力してやっているわけです。なのに、地上ではなぜ、

「キリスト教だ、仏教だ、何だかんだ。キリスト教は了簡が狭い」

とか、一国の指導者が言ってみたり、実に哀れむべき状態だと私は思うけれども、いかがですか。

それは一つはやはり、キリスト教の伝道をなされる方にも一端の責任はあると思う。

「キリスト教でなければいけません。他はみんなだめです」

と、なんとケチ臭いことを言っているのだろうと、私は思っています。神の思いと人の思いは全然違うんです。神さまは無条件にすべての人に生命いのちを与えたい、生命を生きてほしい、本当の生命を味わってほしいと思っておられる。しかも、その生命は神さまだけがお持ちなんです。残念ながら、皆さん、どなたに聞いても、どんな学者であろうが、ノーベル賞受賞者であろうが、何であろうが、

「本当に永遠の生命をお持ちですか？」

と聞いたら、きつと答えられないですよ。

「えっ、永遠の生命とは何ですかっ？」

「いや、死んでも死なない生命、死んでからのちにもつと凄いと輝く生命のこと。そんなの、ありますか？」

「いえ、私はとてもとても、そこまでは考えておりません」

「では、まあしばらく待ちましょう」

とか。ノーベル賞であろうが何であろうが、全然関係ない。皆さん一人ひとりが掛け替えのない人間でしょ。そこから出発します。一人ひとりが掛け替えのない人間です。病院で、

「あなたはノーベル賞受賞者だから大事にしますよ」

「あなたは職業は何もない？ あとあとあと」

と、そんなことを言ったら、大変なことになります。命というものは、どなたであろうと、本当に最大限に尊ばれるべきもので、差別はあってはならない。

私の専門は法律の世界ですけども、「法の下もとの平等」というのもそういうことです。

「この人は大臣だから、捕まえるのはやめよう」

とか、そんなことはできない。法の下もとの平等というのは、どんな人でも罪を犯したら、必ずそれに対する処遇を受けなければならぬ。横綱であろうが、幕下であろうが同じです。ただ国会会期中は逮捕されないという特権がありますから、これは法律でそう決めているから別ですけども。そうでなければ、どなたさまでもやはり犯罪の嫌疑があれば、法律に触れるようなことがあれば、調べなければならぬ。平等なんです。

命は、人の身分とか生い立ちとか、その他の、



「あの人は立派なことをやってきた人だから、この人はこういうことにとって大事な人だから特別に」

ということとはあつてはならない。あるはずがない。命は等しく尊い。しかし、その命とは何ぞや、命とは何ですかと。これは、我々自身の中から答えは出てこないと思います。みな、この地上という閉ざされた世界に生きていますから。

「私は死んでから——皆さんはお亡くなりになつてから——それからどこへ往くの?」

と。誰も知らない。

「いや、仏さんのところへ往くんや。いや、キリストのところへ往くんや」

と、みなイメージは持っています。イメージは持っているけれども、誰も往つた人はいない。たまに臨死体験で還つて来た人は、素晴らしいことを証言してくれます。それは信用するに値すると思いますけれども、それもほんのしばらくの間、往つて還つて来たんですから、本当の意味で永遠の無限の世界をととても語りつくせないと思います。

ということは、向こうから、向こうを本籍としてここへ出張して来てくれる人でないと、それは語れない。当たり前のことです。我々は地上の世界にいるときは、アメリカへ行つても、国籍は日本。出張してアメリカへ行きましたといつて見られるけれども、誰も

「私は、国籍は天国で、地上へ出張してきました」

なんて言えないでしょ。

旧約聖書の中にいろいろ預言者というのが出てきます。これは神さまの霊を受けて、「語れ!」という言葉が語らしてもらつていただけで、国籍は相変わらず地上なんです。国籍は地上人でありながら、たまたま神さまからの霊がくだつてきて、預言者を捕まえて、

「さあ、これを語れ!」

「いやですよ」

「いや、語れ!」

と、無理やり語らされている。

「語ればいいんですよ、語れば」

なんてふてくされて、始めは語りだす。

神さまの霊に捕らえられたら——それはイザヤ書にもあります——イザヤは、

「私は唇の汚れた者です。私のような汚れた者は神様のことをお伝えできません」

と。そうしたら、火焰天使が飛んできて、唇を焼け火箸で焼いたという幻を見た。

「もうお前は潔い、だから、語れ!」

「はい、語ります」

と。神さまのことを語るにしても、それだけ神さまに捕まえられて潔められて、
「さあ、お前はもう別人になったから、さあ、語れ！」
と。それで語るんです。それが旧約聖書の預言者の世界です。だから、イエス・キリストと
いう方は本当に凄い。国籍は天国ですよ。では、天国とはどこにあるんですかと。

●聖霊による新生

「人、新たに生まれれば、神の国を見ることあたわず」と、ヨハネの福音書に出てくる。

「人は新しく生まれなければ、神の国を見れない、入れない」

と。ニコデモという方はイスラエルの大学者で、指導者です。ところが、イエスというお方がどうも凄い方らしい。でも、表向き出かけて行ったらだめなんです。イスラエルの指導者が名もなきイエスの所へ訪ねて行って教えを乞うた、なんていうことになればとんでもない。だから、夜こっそり行つた。ヨハネ福音書の3章に出てきます。夜こっそり行つて、

「先生、神さまがご一緒でないと、あなたがなさっているような素晴らしい御業は絶対^{みわざ}にできっこありません」

と言つて、もちあげた。そしたら、イエスは何と仰つたか、

「人は新しく生まれなければ、神の国を見ることできない。人は水と霊から生まれなければ、神の国に入ることができない」

と。見ることも入ることもみな非常に動的でしょ、頭で考えている世界ではない。つらつらと見る、その中に入つて行く、實在のことです。その實在界から——我々は地上しか思つていませんが、そのお方はこつちへ来たんですから——誰も見えない所からおりてきた。しかも、人の形をして降りてきた。でも、やつていらつしやるのが凄い。凄いの一字に尽きる。

「その秘密は何ですか、こっそり教えてちょうだいね」

と、こういうふう²に聞いたわけですよ。そしたら今言つたことが出てきているわけです。

これは皆さんにお配りしてあるプリントの、ヨハネ福音書3章「聖霊による新生」(ヨハネ3・1〜8)というところに載っていますので読んでみましょう。

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。²ある夜、イエスのもとに来て言つた。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行ふことはできないからです。」³イエスは答えて言われた。「はつきり言つておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

いきなり、そんな「人は新たに生まれなければ」なんてことを言われても、



「私はもう年寄りの後期高齢者なんです。そんなのは無理ですよ、新たに生まれるなんて」

と。皆さんは笑われるけれども、そのとおりのことを言っているんですよ。

4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」⁵ イエスはお答えになった。「はつきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。⁶ 肉から生まれたものは肉である。

我々は「肉から生まれたもの」です、肉体の誕生をしましたから。

霊から生まれたものは霊である。⁷ あなたがたは新たに生まれねばならない』

とあなたに言ったことに、驚いてはならない。⁸ 風は思いのままに吹く。あ

なたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。

霊から生まれた者も皆そのとおりである。」(ヨハネ3・1-8)

これは完全に私たちの日常の理解を超えた次元からの言葉です。しかも、イエスという方はそこからくたくた来て来られた方で、本籍は天国なんですから、天国から地上に出張して来られた。そしてまた天に戻って行かれるんです。還^{かえ}って往かれる。このイエスという方は、ニコデモがこうやって真剣に質問するものですから、こんなふうに誠実にお答えになったけれども、ニコデモは全くわからないわけです。

「何のこっちゃ、これは? 『風は思いのままに吹く。それがどこから来て、どこへ

行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである』なんて、千の風に乗ってかな?」

なんて、今の人だったなら思うかも知れません(笑)。

「私は風のように自由です」

と、あの歌は素晴らしいけれども、やはり新しく生まれなければ、あの歌のとおりになろうと思つたら。それは生まれるといつても、死んでからだだったらつまらないですよ。地上にいる間に既に生まれて、地上に居る間に既に新しく生まれて、新しい生き方をさせてもらつて、お役を果たし終えたら、向こうの本ものの世界に今度は迎えていただく、これでないとね。

「死んだ時が新しく生まれるときです」

というなら、

「だったら、死ぬまで何しているの?」

ということになっちゃいますよ。だから、このキリストが語っておられることは、正に我々この地上に、娑婆^{しやば}に生きている人間に本当の生命を与えることです。

〔註〕「千の風になって」の歌詞。「私のお墓の前で泣かないでください／そこに私はいません／眠ってなんかいません／千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたつ



ています」

●五つのパンと二匹の魚

この世は今、慘憺たるものです。けれども、今だけではない。歴史上、非常に満ち足りた時代というのは少なかったと思う。満ち足りている時代はろくなことがない。元禄時代であれ、頽廢なんです。武士道は、むしろ苦しいときの方が本ものが芽生えてくる。鎌倉時代がそうです。鎌倉仏教もそうです。このイエスが生きておられたときも本当に貧しい時代でした。その中で本当の生命が現れてきた。暗闇の中にポツと花が咲いてきた。それがイエスだった。ですから、今はこんな不景気な時代で、

「食べるものもない、働く場所もない、そんな人間にキリストのことを語ってくれなくて結構だ。食をください」

「わかるよ、けれどもね、それでは豊かになったら、あんた、求めるか？」

「いや、豊かになったら、要りません」

と。これが人間でしょ。ヨハネ伝の中に、

「五つのパンと二匹の魚で五千人の人を養われた」

という場面がある。これはマタイもマルコもルカもヨハネにもみんな出てくる。

「男だけ数えて五千人いた」

というんですから、女性たちや子供を入れたら一万人にもなるうという大群衆です。それがお腹^{なか}がへって、夕暮時で寂しい所でどうしようかと。弟子たちに聞かれても、「いや、どうにもなりません」と。子供がきて、

「お母さんが持たしてくれたパンがあります、五つの大麦パンと二匹の魚があります。これを使つてちょうだい」

と言つて、差し出した。そしたら、イエスはそれを取つて祈られた。それでお渡しになると、不思議に減らないんです。

「減らない」という話は旧約聖書の中の「列王紀略」に出てきます。エリヤという凄い預言者がザレパテの寡婦の所へ行つて、その寡婦と息子は飢え、死にかかっている、それをつかまえて、奇蹟をやる。

「壺の中の油が、いくら汲んでも汲んでも減らなかつた」

という奇蹟がちゃんと旧約聖書に出ています(列王紀略上17・8〜16)。エリヤそれからそのお弟子のエリヤとか、そういう特別な人は特別なことをさせられている。

イエスという方は本当に天からくだつてきた。そして、五つのパンと二匹の魚で満足させられました。ヨハネ伝6章に出てくる。そしたら、何と群衆は

「この人を捕まえて、王様にしよう。食糧問題は解決だ」



と。イエスは逃げて行かれたと書いてある。そして山にこっそり隠れて祈っておられた。そのくらいに人が思っているのはパンです。一生困らないパンがほしい。一生困らない食がほしい。ところが、イエスという方はそんな次元ではなく、

「このパンを食べたつてまたお腹なかがへる。そしてそのの繰り返しをして、70、80、90歳になったらもう終わり。それであなたたち、いいの？ 神さまはもつともつと凄いのをあなたの方に差し出そうとして、私をこうやって出張させてくださつたのに、出張命令をもらつて来ているのに」

と。パスポートは、残念ながら地上では通用しない。「証明しろ！」と、ユダヤ人たちがイエスに迫る。

「神さまが私のことを証明してください。私は神さまによつて、『せよ』と言われたことを、奇蹟の業をやっている。この二つでどうだい、あかんか？」

と。そんなことがヨハネの福音書にずっと出てくる。ものすごく楽しいですよ、ヨハネの福音書をお読みになったら。時代はユダヤの頃です。ユダヤ人と宗教家たち、それに振り回される群衆たち、それとイエスです。イエスはたった一人です。弟子どもはいますけれども、頼りない。なにせ直弟子たちの出身は漁師ですから、大事な時は頼りない。

イエスさまは、ニコゲモみみたいな人にもそんなことを仰る。完全に向こうは狼狽ろうばいして、「参りました！(降参しました)」というわけでスゴスゴと帰つていくような次第です。そのイエスがパンの奇蹟をなさつたら、捕まえて王様にしようとする。それでイエスは山に逃れていく。山で祈っておられる。

弟子たちは先に帰る。湖の途中で弟子たちは嵐にあつて舟が進めない。そしたら、

「夜明けの4時頃、イエスは湖の上を歩いて来られた」

と書いてある。弟子たちの舟に近づいて来られる。「私だよ！」と。弟子たちはおつたまげると。そういう場面が出てくるでしょ。神学者は、これを

「復活されたイエスが歩いてこられた」

と読み替えている。神学者という方々はとても賢かしこい方で、頭で理解しようとなさるから、「そんな肉体のイエスが湖上を、波の上を歩いて来られるはずがない」

とお考えになる。私はそう考えない。イエスほどの方が、国籍は天でしょ、天からおりてきた方が、祈れば靈化れいかしますよ、本当に。ある時、祈っておられたら、

「まばゆい姿に変わられて、エリヤとモーセが現れてきた」

と書いてある。ペテロとヤコブとヨハネの三人がいたが、もうおつたまげ、

「こんな素晴らしい所に、ここに小屋を三つ作りましょう。そして永遠に一緒に住みましょう。一つはあなたのために、一つはエリヤ、一つはモーセのために」

と、何を言っているかわからない、というのが出てくる。ルカ福音書の9章あたりに出てき



ます。そのようにまばゆい姿になる。だから、イエスという方は本当に国籍は天でしょ。さまざまから出てきた方でしょ。祈っておられたら、そのくらいに変貌されて当たり前なんですよ。水の上をしずしずと歩いてこられても、不思議でも何でもない。私はそう思っている。でも、証明不可能ですけれども。私はそのくらいのお方だと思っっているんです、イエスというのは。全人類の罪を背負って、それで十字架で死んで、どっこいその後現れてきた。どこにも死体もなかった。そして今度は40日後、弟子たちに言われた、

「お前さんたちは祈っていらっしやい。そして今度は、聖霊となってお前たちにくつつくから」

と言つて、天へ昇って行かれた。それから10日後に、祈っていた弟子たちに火の如きものが降^{くだ}ってきて、弟子たちは生まれ変わったという、使徒たちの伝道の記録があります。新約聖書の「使徒言行録」という所に出てきます。

●神さまの贈り物

それからの弟子たちは、本当に見違えるような別人のようになって働きます。イエスという方が乗り移ったら、凄いことが起こりますよ、誰だって。そういう凄い世界を私たちは本当に体験する。

「なるほど、そんな凄い世界があるの!? これは地上におったらわからんわ」

と。地上でどんなにもがいてみても、地上から向こうを見ていたらわからん。向こうから出てきた人間だけが証言しているわけです。いくら、

「これは本当だよ、よくよくあなたに言っておく」

と言つても、わからん。これが人間ですわ、皮がむけないと。一皮むけ、二皮むけ、脱皮しないと。セミだってそうでしょ。地中のセミが脱皮して、ポカッと割れて、きれいな姿になつて空中を飛び回って、「シャン、シャン、シャン」と真夏になつたら鳴いています。私はあのセミにもお願いしたい。

「二週間の命を終わつた時に天界へ行つてね」

と。地中にいて空中にきて、あのように盛んに命して2週間鳴き叫んで——あれは命の喜びを歌っていると思う——終わつた時にもういっぺん地上へ戻るのは可哀相だ。亡骸^{なきがら}は地上にあるけれども、

「セミの魂はきつと天国へ行っているだろう。天国で会いたいね、セミさんー!」
と、そういう気持ちです。

キリストを受けとるようになったら、ものの見方が変わってくる、すべてのものに対する見方が。今までは地上の事だけの見方で見てきたけれども、向こうが開けて、向こうの光がズーッと差し込んでくると、全然違う。山々だって輝いて見える。自然を見ましても、



命している。人間だけがしょぼんとしている。人間だけがうつむいている。皆さん、セミに負けたらあかんですよ(笑)。でも、自分からやせ我慢で頑張っても絶対出てこない。だから、「あげよう!」という、これが神さまの贈り物なんです。

「これだよ、イエス・キリストという方をあなたの方に差し出すから、この方を受けとりなさい。その方と本当に霊において、心において、内的に一つになったら、みかけは同じだけれども、中味は変わっているよ」

と。これが「新しく生まれる」ということ。それは神さまだけがやってくくださる。我々はどうなんかに修行を積んだつて、新しく生まれられない。

日本でも「千日回峰行」^{せんにかいほうぎょう}とか、いろんな仏教の修行をなさる方があります。私はそんなことをやってませんから、そのお方に聞かねばなりませんけれども、

「何か変わりましたか?」

と、テレビの中で質問されたら、

「いえ、何も変わりません、前と一緒や」

と言っていましたよ(笑)。でも凄い修行をなさる。「阿闍梨様」^{あじやり}とかいつて尊ばれます。

我々の世界は何も要らん。そのままがいい。病の方なら寝たつきりでもいい。どこにでもキリストは来てくださる。「心だよ、心だよ」と。我々はがんじがらめに自分で心を鎖^{とく}しているんです。

「狭い門から入れ」

と仰つてますけれども、自分が鍵かけて鎖している。キリストがトントンと戸を叩いて、

「さあ、私だよ、扉を開けて!」

と。開けたら、サーッと入つて来てくださる。

「こんな汚れた人間にあなたが入つてきたら、もつたいたいです」

「いや、私がおうあなたを清くした。十字架の血潮で洗った」

と仰つてくださる。

キリスト受難の秘義

これがイザヤ書53章の「キリスト受難の秘義」(イザヤ53・1〜12)というところです。イザヤという預言者は、誰のことを預言しているのか本人はわからない。わからないけれども、紀元前何百年か前にこういう預言をしている。本当にこれは誰のことを言っているのか、預言している人自身がわからない。ただ、イエスという方は、これは自分について書かれている預言だというふうに受けとられた。

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主〔神さま〕は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のよ



うに、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

イエスはもつと輝かしかつたと思うんですけども、こんなふうには預言されている。

3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。

正に十字架にかけられるあのイエスの姿を思いうかべてください。人に叩かれ、唾きせられ、鞭打たれ、さんたん惨憺たる姿です。

彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

と、その当時の人たちは。ところが、

4 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。

十字架の姿はそうでしょ。人々はあれだけ恵みを受けていながら、宗教家たちにそそのか唆されて、「バラバという強盗殺人の囚人を赦せ、イエスを十字架につけろ!」

と。ローマの総督ピラトは赦したくてしょうがなかった。ピラトはローマ人でしょ。宗教に関わりはない。治安維持だけが目的なんです。治安が乱れたら、ピラトは責任をとらなければならぬ。だから、何とかおんびん穩便に、

「あなた方はすげ過越の祭の時は、どんな重い罪の人でも赦してやるではないか。

どうだ、このイエスを赦したらどうだ?」

「だめだ、バラバをゆるせ!」

「なら、お前たちは責任をとってくれるのか?」

「その血の責任は私たちがとる!」

と言って叫んだ。

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ!」

と、騒然としたので、このまま放っておけば、騒乱罪になってしまうということで、「それでは、仕方がない」と言って引き渡した。ユダヤ人たちには死刑の権限がなかった。死刑をやろうと思ったら、ローマの許しを得ないといけない。ピラトは、これは宗教上の争いだ。宗教問題は裁判にかからないんです。今でもそうです。宗教は宗教の内部でやってくれども仕方がないので引き渡した。それで、人々はどう思ったと書いてあります。

5 彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎とがのためであった。彼の受けた懲こらしめによって、わたしたちに平和が与えられ、

この「平和」は「平安」です、安らかさです。



彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

本質的には私たちは、心の傷も、心の痛みも全部いやしていただいた。

⁶わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。」(イザヤ53・1〜6)

「罪」といいますね、キリスト教は「罪、罪、罪」といつて、嫌がられるんですよ。

「悔改めなさい、あなたは罪を犯したでしょう。毎晩、寝る前に悔改めなさい」

なんて言われると、しょぼんとしてくる。そうではないですよ。神さまに逆らっているという姿が罪なんです。人間はみんなそうです。生まれてきた人間はみんな自律心があります。プライドがあります。「神さまなんかくそくらえ」と思っているでしょ。それが罪なんです。わからないんです。神さま側から見たら、

「こんなにもあなた方のことを愛して、あなた方のために善かれと思っっているのに、全然受けつけてくれない。悲しい、寂しいね」

と。孤独ですわ、イエスさまは。最後には弟子たちも捨てました。たった独りです。十字架にかかった。そして、十字架の上で何と言われたか。

「父よ、彼らを赦してやってください。自分たちのやっていることがわからないからです。彼らを赦してやってください」

と。そして、

「私の霊を聖手に委ねます」

と。その姿だけでも、私は首を垂れます。

●キリストを受け入れて天国へ行く

「キリスト教とは、敵を愛さねばなりません。左の頬を打たれたら右の頬を出さなければいけませんか」

とか、そんなことはどうでもいい。とにかく、キリストは仰ったとおりのことをやっておられる。我々は自分のために善くしてくれるものは大事にする。でも、そうでないものは徹底的にやっつける。これが我々の正義感です。そうでしょ。

「殴られて、殴られっぱなしなんて、そんなバカなことがあるか」

と。これが我々の正義感です。ところが、キリストは、

「殴った奴は可哀相な奴だ。殴らねばならないという根性は可哀相だ。彼らを救ってやらないといかん」

と。全然レベルが違う。弱虫ではない、本当に強いんですよ、キリストは。

「人を憎んだり、貶めたり、殴ったり、そんなことしかできない奴は哀れな奴だ。そんな者は神の国には入れない。本当に神の国に、愛の国へ入れるのは、神さま

と同じ心根のものでないと入れない」

と。これは天然法則でしょ。似た者同士です。神さまに似た者が神さまの所へ行く。サタンに似た者がサタンのところへ行く。ヨハネの福音書に、またユダヤ人との問答があつて、

「私の父は神さまだ。あなた方ユダヤ人は『アブラハムが先祖だ』と言っているけれども、そのアブラハムが先祖だと言いなから、私を殺そうとしているではないか」

と。本当に殺そうとしている。イエスがなされた善い業を全部、それを「けしからん！」と言う。何でけしからんか、

「彼は神の名をかたる悪い奴だ。『私を見た者は父を見た』と言う、あいつは神と自分を同じと、神と等しくしている。冒瀆罪だ」

と。安息日に人をいやされたら、

「安息日違反だ。これは死刑に価する」

と、そういう判断です。イエスは言われた、

「神さまは人を助けたい、生命いのちづけたい。安息日に苦しんでいる人がいたら、放っておけないではないか。神さまは今でも働いていらつしやる。生命を与え給う神さまは、『せよ』と私の中で仰つたから、病める人に手を按おいて癒いやした。そのどこがいかなんの？ 私は自分でやってない。神さまのご命令通りにやっている」

「けしからん、けしからん、ますますけしからん！」

と言つて彼らはイエスを殺そうとした。ヨハネ伝5章に出てきます。そのくらい「神の思い」と「人の思い」は違います。同じ聖書を經典としていながら、その受けとり方が全然逆なんです。そういう、神さまの御思みいをそのまますんなり受けられない人間の性さが、これが「罪」という、「原罪」とかいますね。理屈ではなくて事実なんです。誰もこの地上の人間はそのまま、

「私は神の子です、私の中には神さまがいつぱいいます。神の性質ですよ。死んだら、すつと向こうへ行けるのは当たり前です」

と、そんなことを誰も言えません。「ちよつと待った、証明書を見せて」と。天国へのパスポートなんて誰も持つていない。それで、あきらめていたんです、人間はみんな。

「死んだら、お墓に行くものや」

と。それである「千の風」という歌が生まれてきたけれども。

「そうではないよ、千の風になつて飛ぶんだ。お墓の中に眠っていませんよ」

と、希望を与えてくれる。その秘密はどこにあるか。キリストがそれをやってくださらないと、イメージだけではどうにもなりません。キリストという方は、そういう私たちのどうしようもないものを全部、背負いきつた。それがさつきの、



「⁶我々は、道を誤って、それぞれの自分勝手な方角に向かって行った。私はわが道を行こう」と、立派なんですよ。

「我が道を行かん。私は自分の意志で行く。自分で自分の道を決められないような弱虫はだめだ。自己決定だ」

と言う。でも、自己決定が本当に正しい道ならいいけれども、奈落の底へころがりこんでいく道を正しいと思ひこむことだっていくらでもありますから。そういった一番大事な神さまを蹴飛ばしているようなその罪、それをよりによって、キリストに負わせられる。そんな無茶な話がありますか。冤罪^{えんざい}もいいところではないですか。人の罪を全部ひつかぶっているんです。神さまがそうなきつた。

⁷苦役^{くえき}を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかつた。屠^{ほふ}り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかつた。

この十字架の場面はずっと福音書に詳しく出てきます。ゲツセマネという所で真剣に祈られた。

「お父さま、本当に私が十字架を負わねばなりませんか。これが本当に御意^{みごころ}でしょうか。本当に今がその時なんでしょうか。はつきりとお答えください」

と、苦しんで祈られた。でも、「そうだ」ということがはつきりした。そこで決然と立ち上がられた。もう一切、迷いなし。そしてもう、誰とも話をなさらなかつた。ピラトの前であるが、どなたの前であろうが、イエスはほとんど沈黙を守っておられます。言い訳をしたってしようがないというわけですよ。だから、彼は口を開かなかつた。

。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか、わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。彼は不法を働かず、その口に偽りもなかつたのに、その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者と共に葬られた。

だいいち「富める者」というのは傲慢ですから。まともに真面目に働いていて富がたくさん蓄積するというのは、この時代にも多分なかつたでしょう。だから、「富める者」というのは、どこか何か変なところがあつたのではないでしょうかね。「神に逆らう者」と「富める者」が同格に扱われています。そういうものたちと一緒にされたという。

¹⁰病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自ら^{みづか}を償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる。¹¹彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負つた。¹²それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受ける。



イエス・キリストを受け入れて、天国へ行く人が続々と現れてくるということでしょう。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。」(イザヤ53・6〜12)

凄いでしょ。イエスがおいでになる何百年も前に、預言者は誰のことを言っているのかわからなくて、こういう預言をしている。イエスという方は、これを自分について書かれている預言としてお受けとりになった。そのとおりの道を歩まれた。

●神の求め給うもの

ついでに、ミカ書の6章「神の求め給うもの」(ミカ6・6〜8)というのを見ておきましょう。

「⁶何をもって、わたしは主の御前に出で、いと高き神にぬかずくべきか。焼き尽くす献げ物として、当歳〔満一歳〕の子牛をもつて御前に出るべきか。⁷主は喜ばれるだろうか、幾千の雄羊、幾万の油の流れを。

こんなものを献げ物にして、主は喜んでくださるのだろうか。あるいは、子供を犠牲にして献げるべきなのか。昔はあつたんですよ、身内のものを犠牲に献げるといふのが。

わが咎を償うために長子を、自分の罪のために胎の実をささげるべきか。よ、何が善であり、主が何を御前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ6・6〜8)

「正義を行い」というのは、いわゆるこの世的な正義、人間が考えた正義ではありません。神さまの御意みこころにならなくて歩むことが「正義」「義」なんです。神の御意にならう道が義の道なんです。これはキリストしかできなかった。ユダヤ人たちはみんなが自分を、神の道を歩んでいると信じていた。でも、やったことはキリストを殺すことだった。それに帰結しました。新約聖書の後半にパウロの書簡がある。パウロ(サウロ)はキリスト迫害の急先鋒でした。ユダヤ人の律法のチャンピオンがイエス・キリストを迫害して、大祭司から添え文をもらって、ダマスコにいるクリスチャンたちをひっ捕らえるために馳せ参じて行った。その途中で光に撃たれて、ぶっ倒された。

「あなたはどうなりましたか!？」

「お前が迫害するイエスである。弟子たちに対する迫害は私に対する迫害だ!」

と。それでパウロはそこで光に撃たれて、目が見えなくなった。ものが言えなくなった。三日間、絶食した。完全に打ちのめされた。そしたら、ダマスコにアナニヤという人がいて、その人にキリストのお示しがあった。

「サウロという若者が今、祈っている。サウロの所に行って、手を按おいてやっ



てほしい」

「いえ、とんでもない。あのサウロというのは恐ろしい奴ですよ。あれにかかつたら、ひとたまりもありません。みんなブルブル震えているくらの恐い人です」

「いや、そうではない。サウロは祈っている。アナニヤよ、お前さんが行くということをちゃんとサウロに示してやったから、行ってやれ」

と。そして、アナニヤが行って手を按おいて、

「兄弟サウロよ、あなたがこちらへ来る道すがら出会ったイエスという方が私をお遣つかわしになった」

と、「イエスの御名みなによって」と言つて手を按おいたら、

「目から鱗うろこの如きもの落ちたり」

と目が開かれた。そして食事して元気になった。

「イエス・キリストは主しゅである！」

とすぐに言い出したのは凄い。これは物凄い転換です。だから、

「あいつは裏切り者だ！」

ということ、パウロは命をずっと狙ねらわれました。でも、

「それは望むところだ」

とパウロは言いました。「死刑で当たり前の人間をキリストはお用もちいくださいました。命を与えてくださった。そして一番弟子に加えていただいた。こんな有り難いことはない」と言つて、パウロは喜び勇んで地中海世界を伝道して行きました。

「私の血を注ぐことを私は最大の喜びとする」

と、熾さかんなるパウロになりました。それは全部、本当の話です。復活されたキリストがそのようにパウロに乗り移ったわけです。それは何も昔の話ではない。今もありありと、「はい！」と言つて受けとる者には全部それと同じようにしてくださる。現れ方は様々です。異言がほとほと迸ほとほとり出るといふような人もあります。私には何もありませんでした。私は異言なんて何もない。全身しびれてぶつ倒れるということもなかった。でも、年々深くなってきた。

「私の語った言葉は霊であり生命いのちである。肉は役に立たない。本当に人を生かすのは霊である。肉から生まれた者は肉だ。霊から生まれなければだめだ。霊によって霊の誕生をしない」

と。イエスの言葉というのは、単なる言葉ではだめです。言葉の中に生命がこもっている。力がこもっている。ですから、さつき、

「天くから降くだってきて、空むなしく天へ戻らない。ちゃんと仕事をしてから天へ帰かえって行く」

とありました。キリストは正に地上でもの凄いことをしてくださった。そして、御業みわざを終おえ



て天に帰って行かれた。そういう証言の書が福音書なんです。ですから、先入観を捨て去って、神学者が何を言おうが、偉い先生方が何を言おうが、そんなことは度外視して、一人の人間、一人の生ける魂となつて福音書を読むことです。

我々は生命が欲しい。本当のことを知りたい。本当のものが欲しい。しかし、それはどこを捜しても地上にはない。天からだけ降^{くだ}ってくる。天の方^{かた}だけがそれを分かち与える。キリストは正に自分の体^{からだ}を引き裂いて——五つのパンを引き裂かれて五千人の人を満たしたように——イエスのご自身の体を引き裂かれて、無限無量に人々の口の中へ、お腹^{なか}の中へ入っていく。血潮が入っていく。そして生けるものとなる。そういう世界です。

実験してください。これはご自身の体験でしか確かめられません。しかも、皆さん、地上で高齢化社会だから100歳まで生きれると思うと、大間違いです。ある人は早く亡くなります。期限は120歳という終わりが決められているけれども、そこまで大丈夫だという保証は何もない。若くして死ぬ人もあります。この世相です。どんな災^{わざわい}禍^{わざわい}がふりかかってくるかわからない。「いつまでもあると思うな親と金」とか、お寺の掲示板に書いてありました。孝行しようと思った時にはもう親はいないということですから親どころか皆さん一人ひとり、いつまでという保証は何もない。最大限では120歳ということなんです。ギネスブックで今は117、118歳ですか、そこまで行つてませんか。まだ120歳まで生きた人はない。そうでしょ。だから、最大そこまでと言われてるだけで、早いのは明日かもわからない。

「いつ何があつても大丈夫です、私は既に永遠の生命をいただきました」と言えるようにしてあげるといのがイエス・キリストの約束なんですもの、こんな約束を受けとらなかつたら損ですよ、ほんまに損ですよ。

●天に宝を積む

「汝ら、宝を天に貯^{たくわ}えよ」

と、今日のプリントにも出てくる。

「天に宝を積む。あなた方の宝のある所に心もあるんだ」

と。宝くじを買つて、あんなのが当たつたら大変です。人が続々と詰めかけて、

「あんたは当たつたんでしょ、金貸して！」

と言ってくる。それでノイローゼになつてしまいますよ。どこへしまつてよいかなと悩む。空き巣は五分で見つけ出すそうですね(笑)。マタイ伝6章で、

「天に宝を貯^{たくわ}えよ」

とキリストは言われた。地上はあぶないですよ、無くなつていきます。だから、天に宝を積めど。「でも、それでおまんまを食べられるんですか？」と。それに対して、

「まず神さまを求めなさい。神さまの御^{みくに}国^{くに}を求めなさい。そうしたら、必要な



ものは全部添えて与えられるから大丈夫だよ。あなた方を飢えさせはしない」と言われた。「どこに保証が有るんですか？」と人はいうけれども。

イエスという方は、すごいでしょ。大工の子供として生まれたということはわかっている。クリスマスということは、あのクリスマスの物語に出てますから、一応従っておいて結構でしょう。でも、その他はわからない。12歳の頃に、エルサレムの神殿にいて、なにか学者たちと問答して、負けなかったという話はちよこつと出ている。そこからあと30歳の伝道まで何もわからない。多分、親孝行のお方ですから、大工の息子としていろいろ働かれたでしょう。そして、深い祈りをなさっていたのでしよう。旧約聖書を自分で読まれたのだと思います。そして、洗礼のヨハネが現れて、みんなに悔い改めのバプテスマをやった。

「今に神の審判がくる。恐ろしい審判がくる。お前たちみんなはひとたまりもない。さあ、悔い改めろ。たくさん金をむしり取ったら、返してやれ！」と、そういう話が出てくる。

「洗礼のヨハネはラクダの毛皮を着て、野蜜とイナゴで食を養っていた」と書いてある。そこへ、ヒヨコヒヨコと歩いてきたのがイエスでしょ。

「私にも洗礼を受けさせて」と言われた。びつくりしたのはヨハネですよ。

「あなたこそ聖霊でバプテスマをなさる方なのに、水のバプテスマはとてでもできません」

「いや、私は受けたい」

と。なにも自分を特別扱いになさらない。そしてヨルダン川の水に身を浸された。上がってこられたら、天から聖霊が鳩のように降^{くだ}ってきた。

「これこそ私の心になうもの。私はお前を喜んでいる！」

という御声^みがあつた。ヨハネは何千人にも水の洗礼をやりましたが、誰もそんなことは起きなかつた。このイエスという方にだけ天から聖霊が鳩のごとく降^{くだ}ってきた。

「この方こそ神から遣^{つか}わされた世の罪を除く神の小羊だ」

とはつきり、ヨハネは語りました。ところが、そのイエスは聖霊をいっぱい受けたから、さあ伝道かというのと、そうじゃない。まず御霊に導かれて荒野に行かれた。「四十日四十夜、悪魔に試みられるためである」と書いてある。その時、サタンという悪いやつが来た。そこに軽石みたいな石ころがころがっている。それが非常にパンに似ているから、

「これをパンに変えてみる。お前は神の子ではないか」と。イエスは、

「人が生きるのはパンだけではない。神の御口^みから出る一つ一つの言葉で生きる」



とはつきり仰った。人々は、

「パンがなかつたら、ひもじいから、私は神さまを今、求めてもむだです。神さまを求めていけば、パンの問題は大丈夫なんですか!？」

と訊^{たず}ねた。誰もそれに答えられない。イエスは、「私はそれを突き抜けてきた」と。そして、あのように、五千人の人を五つのパンと二匹の魚で養った。

「本気で私の所へ来てごらん。本気で私の所へぶつかって来てごらん。必ず大丈夫だから」

と。人間の命というのは不思議です。40日間、雪の中に閉ざされて生き返った人がいるという。それからこないだ15日間、地下に閉じ込められて——普通は72時間といわれているのはるかに超えて——救出された人がいる。空間ができていたから大丈夫だったという。人間の命というのは自然の命でさえ、このように不思議なんです。もちろん飲まず食わずですよ。学者は、「四十日四十夜」とあるのは、聖書は「四十」という数字が好きだから書いているんだらうぐらいにしか思っていない。私は「四十日四十夜」だと思つてます。

インドのサンダーシングという方は素晴らしい方で——今世紀の方ですよ——そのサンダーシングは何回かその「四十日四十夜」をやった。その方はやはり自分でキリストと同じ体験をしたと思つて、断食をやられた。ですから、「四十日四十夜」というのは決して誇張でも何でもない。とにかく、そういう体験をなさつた。

それから今度は、サタンはイエスを宮の頂きに連れて行った。

「さあ、飛び下りてみる! 天使がサツと現れて、あなたを守る。ちゃんと聖書に約束されている。だから、やってごらん。白昼、みんなのいる所でやつたらみんなびっくりして、あなたについてくるから」

と。イエスは、

「神を試みてはならないと書いてある」

と。足を滑らせた時に、守つていただけでしょう。けれども、

「さあ、飛び下りろ、神さまが助けてくださる」

なんて、そんなことはとんでもない。ここをクリスチャンは間違えないでください。クリスチャンは神さまに守られているからと言つて、9階の屋上から飛び下りたら、とんでもない。そんなことしたらだめですよ。足を滑らせた時に、何か運よく下のネットにひつかかつて助かったとか、そんなことはクリスチャンでなくても、時々、子供さんなんかの場合にありますけれども。絶対、試みてやつてはいけません。

「見ずして信ずるものは幸いなり」

と。聖言^{みことば}を「然り」として「はい」と受けとる。この頃、何でも証拠を求める。プロポーズでも、



「愛しているよ。結婚しよう」

「証拠を見せて。まずお金を積んでくれなくては。一生幸せにしてくれる証拠を見せて」

と。そんな結婚はだめですよ。

「ひもじくても、何でも二人で一緒にやりましょう」

という、二人の心が大事です。ましてや、神さまがついておられる。イエスがっている。体当たりでイエスさまに、

「あなたは本当に一つにしてください。新しい生命をください」

と言う。これは、イエスさまは喜ばれますよ。

●癒されて旅立ちたい

人間は体当たりしていくのが惜しいから、今のポジションを失いたくない。今の幸せな境遇を失いたくない。だから、ガードしている。富める者とか、高い地位の人だとか、学識の豊かな人、それぞれ自分に「これだけは私のもの」というものを持っている人はだめなんです。

「幸いなるかな、貧しき者」

と言われる。「何も持っていない。私は何もありません」と。親鸞さんもそうでしょう。

「私は地獄^{ひじょう}必定の身だ。弥陀の本願^{みだ}だけが私を救ってください。法然さんがそう言ってくれる。私は法然さんの教えに従っていく」

「もし、ウソだったらどうするの?」

「どうするもこうするもない。私は放っておけば地獄なんだ、地獄必定の身だ。こんな自分に何の希望もない。完全に締め出されている。ところが弥陀の本願が私を救い上げてくださる。こんな有り難いことはない。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言う。念仏を称えながら祈りこんでおられる。そうしたら、仏の力が働くでしょ。だから、捨てたくないものをいっぱいガードしている人はなかなか入れない。

「富める者が神の国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る^{ほう}方がやさしい」

なんて言われた。「針の穴」という背の低い門があったそうです。ラクダはコブがあるから、じゃまになって入れない。

「富める者は気の毒だね」

と言われた。これは一つの例ですよ。

「私はこれを誇っています。これを捨てろなんて言われたら、プライドがゆるしません」

というのが人間の誇りなんです。プライドを捨てなさい。死ぬ時は何も、プライドなんか役立ちません。



私が今日持つてきた本『癒されて旅立ちたい』はホスピスの方がお書きになった本で、癌病棟の二千人ほどの方のお世話をしてきた人で、末期癌の人のことを綴つづっておられる。末期癌の人たちは何を望みにして生きているか、末期癌の人たちは何が心にかかっているかと。

〔註：『癒されて旅立ちたい』ホスピスチャプレン物語、沼野尚美著。チャプレンとは施設で働く宗教家のこと。本書は、薬剤師であった著者が神学校に入り、米国の大学院で心理学・カウンセリングを学び、帰国後チャプレンとしてホスピス患者二千人の心のケアに携わる生と死のドラマである〕

皆さんも、癌というようなことになってみないと、そういう心境になれないというのは、ちよつときびしい。癌ということになると、多くの場合は、余命一年あるいは三か月とか、そういうことを言われます。それからということでは残念です。せつかく健康をいただいて、人のためにも働ける、世の中のため、人のために尽くせる、そういう地上の命をいただいている間に、本当のものに目覚めさせていただいて、神さまに乗り移ってもらおう。キリストは乗り移りたくてしようがないんですよ、みんなの上に。そして一緒に行きたいと。

「旅は道伴つれ世は情け、一緒に行こうよね」

と、これがキリストの御思みいですから。キリストが何をしてくれたのかというと、

「十字架でああなたの汚れ全部を私がきれいにしたから、心配いらん。あなたのことが好きやねん、あなたのことを愛しているよ」

「そんなことを私は人から聞いた事がない。愛しているよなんて言われた事がない」

「いや、だから、私はあなたのことをとびきり愛しているんだよ」

と。だから、キリストの所へは、病人だとか、この世の中で捨てられている人がたくさん行つたんです、その当時。行き場がない人たちがみんなキリストの所へ行つた。自分を何者かと思つている人はみんなキリストを拒んだ。今だって、変わらない。

●孫の旅立ち

昨年(2009年)の12月14日、石田翔しょうくんというんですけれども、22歳6か月でした。病気で亡くなりました。翔くんは生まれて6か月くらいした時に福山型先天性筋ジストロフィーという病気だった。だから、ずっと車椅子生活でした。本当に朗らかな明るい子で、周りをいつも明るくしてくれて、周りの人にいつも「ありがとう、ありがとう」と言つてました。自分で何もできない。だから、「ここがかゆい」と言つたら、そこを掻かいてやる。「この手をこつちへやつて」と言つたら、手を動かしてあげる。だんだん、年と共に身体が萎縮してきましたから。そういう病気をかかえながら、自分を病気と思つていなかった。そういう身体だと思つていた。

肺炎とか、呼吸器系の病気にも、特に冬にやられるんです。何度か入院を繰り返しました。去年も1月に肺炎か何かで入院しまして、2月の末に帰つてきた。それからしばらくずつ



と調子がよかったが、特に5月18日の22歳の誕生日には素晴らしく元気でした。ところが、8月にインフルエンザがはやっていました。6歳下の弟、こうへい衡平くんというんですが、衡平くんが先にインフルエンザで救急車で指定の病院へ運ばれた。二日遅れて今度は、お兄ちゃんの翔くんが運ばれた。衡平くんは無事に帰ってきたけれども、翔くんはその治療過程で身体の圧迫がひどかったようで、インフルエンザは直ったけれども、身体全体に負荷がかかりすぎて、とうとう8月14日に一旦死にました。40分間、蘇生術を施されて、それで生き返ったけれども、もう相当全体がやられていたから、意識が戻るまでかなり時間がかかりました。一か月ほどたちまして、片一方の耳が聞こえるようになったし、少し身体全体がよくなってきたので、自分がいつもお世話になっている宇多野病院という——身体障害の子供たちをお世話くださる病院——そこへ代わって、二か月ほど入院した。そして、11月21日に私たちの家に帰ってきた。あしかけ24日間、そこで家族と一緒に暮らしました。だんだん心臓が弱ってきて、とうとう12月14日にこの世の命が終わった。22歳6か月でした。

私は、この世で終わって火葬場で焼かれてそれで終わりなんて、絶対に受け入れられない。そんなものであるはずがない。旅立った翔くんも、身体が焼かれて骨になって、それで終わりなんて絶対に言えない。

イエス・キリストがあのような素晴らしい姿で現れてくださった——復活と呼んでますけれども——あれはこの地上の命と異なつた別次元の生命に変貌されたわけです。この三次元の命は「肉」と呼んでますね、肉体の命。それから霊のからだ、霊の生命、これは我々と次元が違いますから、わからない。正にそこから来られたお方だから、そこへ帰って行かれた。その時、手ぶらで帰られたのではない。地上を大掃除して、我々の罪を全部背負いきって、そして天に昇られた。別れる前に弟子たちに言われた。

「私は天の所へ、あなた方のために住まいを備えに行く。用意ができたらまた迎えに来るよ」

ということを言っておられる。ヨハネ伝14章のところですよ。そして、

「決してあなた方を孤児みなしごにはしない。必ず帰ってくる。父なる神さまと私と聖霊という姿になって、これがいつもあなた方と一緒にいるんだからね」

ということを約束された。そのようなイエスさまのところへ翔くんが行ったはずですよ。私は、翔くんは今願うんです、

「いつペン現れてくれよね。向こうへ行けば会えるのはわかっている。けれども、それは待ちきれんから。一年後や二年後で、向こうへ行けないと思う。まだまだ仕事があるし。だから、せめて翔くん、きみの方から現れて、しばしでいいから現れてきなさい。向こうへ行くまで、そうしてよね」

と(笑)。だから、イエスさまもそうやって、たくさんのいろんな人に現れなされたんですよ、



必要な方に。その願いは叶えられるかどうかわかりませんが、絶対に私は翔くんは輝いてキリストの御業のお手伝いをすると思う。

●失われた神の子

幼児のような心でないと、向こうの国へ行けない。キリストが言われているんです、福音書の中で。弟子たちは、

「誰が一番偉いか」

とか、くだらんことを言っているんですよ、本当にもう腹がたちますよ、あの記事を見たら。イエスはこれから天国へ行くその十字架にかかって死ぬというお話をしておられるのに、「誰が一番偉いか」とか。イエスが復活されて、

「誰が右大臣、左大臣になるか」

とか。イエスは言われた、

「そういうことではない。この世では偉い人は威張っている。しかし、神の国は違う。一番偉いものは誰かというと、一番仕えるものだ」

と。イエスは弟子たちの足を洗われた。ヨハネ伝の13章に出ています。それは、自分が神から出てまた神に帰る。その時が来たということ悟られて、たらいに水を汲み、手拭いをぶらさげて、一人ひとりの弟子の足を洗っていく。ペテロは

「もつたいない、もつたいない、そんなことはだめです」

「いや、洗わなければ、お前とは縁切りだよ。私がお前を洗うから、お前と繋がりができている」

というようなことを言われて、席に戻られた。

「私のやったことがわかるかね。あなた方は私のことを先生、主と呼んでいる。そのとおりだ。主であり先生である私が本当に一番卑しい仕事——人の足を洗うという仕事——それを自らやった。あなた方もそのようにやってほしい。誰が偉いかなんて言うのではなくて、一番低い所に身を置く者、一番仕える者、それが天国で一番偉いんだ。お手本を示したんだから、ぜひそうやってほしい」

と。人がとかく「神さまがいる。いや、いない」とか、そんなことを議論したって始まらない。人々の生きている姿、お互いに深く愛し合っている姿、威張ってない姿、嬉々として喜んでいる姿、いろんな苦難があっても耐えている姿、そういう姿を通してしか神さまのことはわからない。キリストは、

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。それによつて、あなた方が本当にキリストの弟子だということを世間の人は認めるだろうから」



と。「奇蹟の業をしろ」とも、「何か他のことをいろいろしろ」とも、「論文を書け」とも仰つていない。漁師たちですもの、出身は。

「互いに仕え合いなさい。争いがあつてはいけません。私はお前たちの所へくだつてくる。人に教えてもらわなくても、聖霊という神さまの霊があなた方一人ひとりに大切なことをみな教えるから、大丈夫だよ」

と言う。これは私たちにはありがたいではありませんか。仏教の方はわざわざインドや中国まで行つて、経典を持ってきて仏教をお広めになった。いろいろな修行をなさつた。我々は居ながらにして、この聖書一つあれば、それを本気で読めば、本気で祈れば、

「イエスさま、そうなんです。あなたの仰つたことは本当なんです。私の生活の中で実証してください」

と。本当に一人ひとりにということ。外には太陽が輝いています。

「ああ、太陽が輝いていますね」

と、それだけではだめです、自分が出て行つて太陽の光を浴びなくては。

「あつ、光はあなたにも届いている。私にも届いている。先生にも届いている」

と。一人ひとりに太陽の光線が届いている。そして熱を感じる。キリストはそういうお方なんです。一人ひとりを本当に生かそうとなさつています。

ですから、ここに比較的、高齢の方がたくさんいらっしゃいますから、高齢の方はこれからの人生、あと何年残っているのか知りませんが、これからの人生を輝くものにしてください。それはキリストという光が入ってきたら、輝くんです。

「私は世の光である。光が来たのに、人は光を拒んだ」

と。これが罪なんです。

「光が来たら、光を受けたい、光を浴びて輝こう」

と。お月さんがそうでしょ。満月が皓々と輝きますね、あれは自分で輝いていてのではない。太陽の光を浴びて、そして皓々と輝いている。あれは太陽の光を浴びて輝いている。皆さんも、キリストの光を浴びて輝いている。自ずと周りの人のそばに居れば、

「あの人の所に行つたら、何かあつたかい、何かいいものが流れてくる。あの人の所に何か寄り添いたんだよ」

と、そういうことがあるでしょ。そういう人柄というものですけれども。内なる人が形作られていく。外なる人は変わらなくても——いや変わつてだんだん衰えていきます。外なる人はどんどん衰えていきます——でも、皺くちやになつても、中から皺くちやをぶつ飛ばすような光が現れてきて、素晴らしくなる。マザー・テレサなんてそういう方だと思ふ。アッシジのフランシスコもそういうお方だつたんでしょう。いろんな素晴らしいお方がいらっしゃいますよ。



皆さんお一人お一人が神の子なんです、本当の意味で。キリストにぶつかるとまでは、失われた神の子です、迷子ですよ。「各々勝手な道を歩んできた」と書いてある、羊みたいに。羊飼いかから離れて勝手な道を歩んできた。目覚めて本当の羊飼いのキリストさまの所に帰っていく。

「よき牧者は羊のために生命を捨てる」

と仰った。やはりヨハネ福音書というのは凄い。本当に読んでいて楽しい。始めはバックグラウンドをご覧になっていいですよ、ユダヤ人というのはどんな民族でどうなっているかと。でもだんだんバックグラウンドを抜きにして、大事などころだけを読んでいく。その中に入っていく。

●万のいかに時あり

私は何十年もこの道を歩んできたけれども、その私ですら、聖書に触れないで一週間、聖書を閉ざしていますと、やはりにぶります。この地上だけの世界にのみならず、にぶります。頭で考えたくなくなってきました、「神の国とはどんな所だろうか?」とか、いろんなことを考える。それではいかに。

私の聖書は、『文語訳聖書(詩篇付き)1967年』と書いてあるけれど——色がいつぱい塗ってあります——これを開いていると、もうウワーツと甦ってくるんですよ、本当に。「おもちゃの兵隊」という話がありますね、夜中に歩きだすような、そんなふうに。だから、絶えず触れてなければだめです。触れていて初めて生き生きしてきます。読むのに長い時間は要らない。本当に自分の大事だと思うところを拾い読みなされたらいい。そして、主イエス・キリストとの交わりを——霊の交わりです——心で思うこと、向こうが思っていること、その交流ができてくれば、自分の中に何か確信のようなものが湧いてきますから。

「そうだ、間違いない。これでいいんだ、絶対まちがいない」

と。だから、これは宝の書ですよ。旧約聖書は、その中の大事な所だけいい。あれはユダヤ人の民族の歴史書ですから、その民族の歴史書の中に普遍的なものが散りばめられている。それをキリストは引っ張り出された。同じ旧約聖書を読んでも、全然読み方がちがっている。ヨハネ福音書5章の所にユダヤ人との問答で、

「あなた方は聖書(旧約)の中に永遠の生命があると一生懸命に調べている。でも、この聖書は私のことを証している。キリストのことを指し示している。

さっきのイザヤ書もそうです。キリストを指し示している。

ところが、その本体である、ご本尊である私がここに立っているのに、何だかんだと言って拒んでいる。来ようとしなさい。『モーセ、モーセ』とばかり言っている。何でやねん?」



ということを書いておられる。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝せよ。生かすものは霊である」
 「肉体的なものを生かすものは、肉体的なパンがあるけれども、それ以上のものが大事なんだよ」

と。本当にこの天の世界の消息を詳らかに語ってください、表してくださったのが福音書です。そういう角度から読んでいきませんと、全然読んだことにならない。

それともう一つはやはり、それぞれのお方にとって、「時」というのがあるような気がします。

「私はいくら読んでもわからない」

「そうか、それではもう少し時を待った方がいいかも知れないね。『万のことに時あり』という。無理は禁物ですから。『時をください、その時を示してください』

と祈られたらいいと思う」

と。私は、無理するのは嫌いです。

イエスというお方は実に伸びやかで自由自在、ツバメのように。ツバメは軌道がありません。列車は軌道があります。脱線したらえらいことです。でも、ツバメは本当に自由に——さっきの「千の風」の歌のように——自由自在です。そういう本当に自由の世界に私たちをお招きくださっている。たとえば、身体は不自由でも、身体は閉ざされていても。限界がありますね、我々は地上では。本当にいろんな限界があります。でも、

「それを越えた本当の世界に、あなた方を飛ばたかせてあげよう、そこで一緒に生きよう。地上に居る間にそれを味わったら、天上へ行ったらもつと凄いからね」と。そういうことを私は思っている。

もう時間がありませんから、エッセンスを申しますけれども。「神の思い」と「人の思い」(イザヤ55・1〜2、6〜13)は、

「東と西が離れているくらい、天と地が離れているくらい、神さまの御思いと我々人間の思いとは違う。違うんだから、その御思いはどうやったたらわかるのか。キリストというお方を送りこんだよ。この方はいわばメッセンジャーだ」

と。高校野球の試合を見てみると、よく、伝令が行きますね、ベンチから高校生の選手へあれですよ。神さまから送られてきた伝令なんです、イエス・キリストは。

「私の思いは何一つ入っていない。父なる神が『話せ、しゃべれ!』と仰ったことだけをしゃべっている。『なせ!』と仰ったことをやっている。私は自分からは何もできない。無能力者だ」

とはつきり、無能力者宣言をしておられる。だから、後期高齢者も心配いらんですよ、だんだん能力がなくなってきましたけれども。イエス・キリストも無能力者ですから。神さまが乗



り移って、いろんなことをなさってくれる。

次に、「へりくだる靈に宿る神」(イザヤ57・15)。いと高き所にいらつしやる方が一番低い所においてくださる。イエス・キリストは一番低いヨルダン川の川底に身を沈められた。高い所に傲然と留まっているような神さまはまだいかなのです。この方は一番低い所に一緒に来てくださる。いと小さき者、いと弱き者、病める者、苦しめる者、その人のそばでじつと担ってくださって、慰めを与えてくださる。心砕けたる者の所においてきてくださる。これが神さまの姿です。

そして、「悲しみに代えて喜びの油を」(イザヤ61・1〜3)、これもイザヤ書の61章1節から3節はルカ福音書の中でキリストが引用しておられる。

それから、「キリスト受難の秘義」(イザヤ書53章)、これはさきほどしました。「神の求め給うもの」(ミカ書6・6〜8)は、「慈しみと憐れみ、御意を行うこと、それだけだよ」と。それから、詩篇103篇「人の思いを超えた神の慈しみ」(詩篇103・1〜13)。これはちよつと開いていただきましょうか。

「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはござって、聖なる御名をたたえよ。」

「内にあるもの」、これは「五臓六腑」といいます。

わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。これは旧約聖書の中の詩なんです。

主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してくださる。慈しみと憐れみの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください。主はすべて虐げられている人のために、恵みの御業と裁きを行われる。主は御自分の道をモーセに、御業をイスラエルの子らに示された。主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。永久に責めることはなく、とこしえに怒り続けられることはない。主はわたしたちを、罪に応じてあしらわれることなく、わたしたちの悪に従って報いられることもない。天が地を超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。東が西から遠い程、わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる。

いいでしょ、これ。正にこのとおりの姿をキリストが表された。

● 山上の説教

次に新約聖書のマタイの福音書も味わっておきましょう。



「山上の説教を始める」(マタイ5・1〜12)と書いてあります。

「¹イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。²そこで、イエスは口を開き、教えられた。

³「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

⁴悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

⁵柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

⁶義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

⁷憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

⁸心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

⁹平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

¹⁰義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

¹¹わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

¹²喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」(マタイ5・1〜12)

これは「山上の垂訓」とか言われていますけれども、なにも「垂訓」といつてたてまつらなくていい。自分がそのような身になった時に、たとえば、悲しんでいる時に、自分が本当に悲しんでいると、ここにくるんです。

「あなたは悲しいよな、今は。私があなただの慰めとなるからね。大丈夫だよ」

と、こう響いてこなくては。命題を掲げているのではないんです、これは。イエスは、

「私があなただをそうするね」

と、いつでも「私がやってあげる」ということが隠されていると受けとってください。

「あなたは心が貧しいね」

と。「心が貧しい」というのは、

「自分に誇るものが何もない」

という姿。なにもさもない根性ではない。

「あいつは心の貧しい奴だな」

というのは悪い意味です。そうではなくて、神の前に謙へりくだっている姿です、「心が貧しい」というのは。イエスがそうなんです。

「私は何ものでもない。私はからっぽだ」

と仰った。からっぽなイエスさまに神さまが100%に宿ったでしょ。そのように私たちもおのれ「サムシング(何ものか)としていたらだめ。ナッシング、何もないんですよと。なかなか日頃はそう言えない。でも、本当に何もなしになった時に言えるでしょう。私はそう思っている。

「何もかも失いました、からっぽです」



「いや、それでいいんだよ。失ったものは必ずまた回復される時がくる。あなたは命があつてよかつたね」

と。大震災とかを考えてみてください。

「命があつてよかつたではないか。必ずいいときがくる。悲しんでいる人、私が慰めてあげるから」

と。柔和な人々。本当に柔和な人々は争いを好まない。殴られても殴り返さないうです、柔和な人々というのは。

「柔和な人々は幸いだ。私も同じ目に合っている。それで私は本当にあなたの慰めになるから。大丈夫だ。地を継ぐよ」

と。「地を継ぐ」は「御国を継ぐ」でもいい。

この世の価値観というのは反対でしょ。富める者、幸福の絶頂にある者、猛々しい者、権力のある者、睨めば震えあがるような恐い存在。ところが、神さまの方はそうじゃない。全く逆です。天と地が遠く、東と西がかけ離れているように。神さまが尊ばれる世界、神さまの価値観と世の価値観は、こんなにも違う。だから、その神さまの価値観にぶつかって、

「ワーツ、よかつた、これで救われた!」

と言える人は幸いなんですよ。でも、

「神なんか、くそくらえ!」

と言っているあいだは、それだけで終わり。この世の生が終われば、「ジ・エンド」です。向こうの世界へは行けません。でも、これを本当に、

「そうだ、そうだ、本当にそうなんだ」と言う。

「義に飢え渴く人々」、義ただしいこと、もつと言えは神さまの義、神の義は何なんだろうかと。

「神さまの前に何が義ただしいのだろうかと、一心に祈り求める人は幸いだ、満たされるよ」

と。宗教改革のマルチン・ルターがそうなんです。あれはカトリックの修道僧として模範僧だった。すべての戒律に従う。ところが、心に平安がない。神さまは審判さばきの神だ。この審く神の審判には自分はとても耐えられない。ルターは、

「神さまの義の前には自分はとても耐えられない」

と言つて、独房の中でとうとう気絶してぶっ倒れていたという。それがある人が見つけて、助け起こして、やつと命を取り留めたという。そのくらいルターは義に飢え渴いていた。しかも、ルターにとつての義は、「審判さばきの義」であつた。神さまの審きの義にぶつかつたら、誰も何ともならん。ところが、目覚めたんです。

「神の義は福音のうちに現れた。信仰より信仰へ至らしめる」



という、ローマ書3章です。神の義は福音に現れた。「福音」というのは、

「イエス・キリストが十字架にかかって生命を与えてくださった」

これが福音、よろこびのおとずれでしょ。ここに神の義が現れた。そこでガラリと変わったんです、ルターは。人間の側の何ものでもない。全く恵みとして、価なき、それに価しない人間に恵みとしてくださった。これが神の恵み、福音、生命である。何か自分の側に根拠があつて、

「これだけいいことをやってきた、これだけ修行を積んできた。だから、ください」

と、これは報酬なんだ。一等賞、二等賞とありますね、金・銀・銅とか、いろいろあります。これはそれぞれやった功績に応じて与えられる。それなりの論理がありますよ、その世界があります。この世はそうです、みんな表彰台なんです。みんなそれを目指してやっている。

でも、神さまの表彰台は全然違うんです。御意を「はい」と受けとる者が喜ばれる。義というの人は人を救う義、その義でなくては。人を救うような義である。しかも、その義というのはキリストほどの義人はありません。キリストは神さまに逆らつたことはいつぺんもない。キリストは我々とどこが違うか。神さまがすべて、神さまの御意が100%。我々は1%くらいが神さまで、あとは己おのれなんです。その義人そのものであるキリストが十字架にかかった。

「私はこの義をあなた方に与える。生命を与えるよ」

と言つた。そこにルターは気がついた。だから、本当に神の前の義というものを真剣に祈り求める人は必ずそこで大転換を起こす。

内村鑑三もそうだった。あの人も武士の流れの人だから余計真剣なんです。アメリカへ渡つて、皿洗いをしたり、看護師になつて病氣の人に仕えたり、いろんなことをやつたけれども、やはりだめだった。とうとうアマースト大学のシーリー総長という方の所へ行つて、

「だめです、どうにもなりません」

「内村君、君は自分を見過ぎています。キリストを見てごらん。イエスを見なさい。」

何も求めておられない。砕けた心、助けてくださいという心だけで充分だよ」

と言われた。『求安録』とか、『キリスト信徒のなぐさめ』とか、そういった小品の中に内村鑑三の心の軌跡が描かれています。本当にそうやってキリストの前に無条件降伏して、

「ああ、イエスさま、何も要らなかつたんですね、この心だけを差し上げればいいんですね」

と言つた時に、サーッと平安が流れてきた。

「まるで江戸城明け渡しよしのぶの心境」

という。将軍慶喜が江戸城を明け渡して、政権交代ですから幕府が握つていたものを朝廷へ返したでしょ。すっかり責任をお返ししたわけです。今までは、自分が自分の主ぬしとして自分で自分をコントロールして、神さまに喜ばれる道はいかがかと、一生懸命でやっていた。け



れども、

「何も要らん。そのまんまからっぽになって、己自身を差し出す。これで良かったんだ」

ということに気づかされる。それが、内村鑑三が新たに生まれた瞬間なんです。

「憐れみ深い人は幸いである」

と、そうですね。心の「清い人」に神さまが映ってきます、その人の心の鏡に。「平和を現する人」はもちろん神の子です。

こんなふうにして、キリストが告白しておられる世界、神さまの世界というのはこの世が尊ぶような価値とはだいぶ違う。そのことにまず気づいていただきたい。そして、それを生き抜いていただきたい。

「そこへ行きたいです、あなたの弟子にしてください！」

と言ったら、絶対に拒まれませんか、キリストは。入門自由です。空席がいっぱいある、キリストの御許には。私はもう弟子にならしてもらって、本当にうれしいと思っています。キリストは私のお師匠さんで、私は弟子です。それから救い主です。私は救われました。私の恩人です。この身を献げて惜しくない。キリストというお方は本当にすごい、私にとっては掛け替えのない、そういうお師匠さんであり、恩人であり、救い主であり、もうすべてなんです。

●キリストとの直結関係

「キリスト教」ではありませんよ。「キリスト」という霊的人格、その方との直結関係です。皆さん、そういう人間に縁を結んでください。それが群れをなして、教会をお作りになっても結構ですよ。でも、「教会」が何ものかではない。キリストというお方と皆さんとがもう切っても切れない。ちょうど赤ちゃんが、臍の緒でお腹の中で結ばれています。そして、お母さんのものが流れています。そのように今度は、イエスキリストという方と皆さんとが一つ一つの見えない絆で固く結ばれている。切っても切れない絆で結ばれている。そして、日々、一緒に生きていく。道を歩いている、御飯を食べていても、眠っている、いつも一緒にいてくださる。お遍路さんというのは、「同行二人」とかいって、いつも一緒に歩いてくださる。イメージはあれでいい。いつも一緒に生活してくださる。

〔註〕同行二人。四国八十八か所を巡る遍路の笠に書かれる。同行は信仰を同じくするの意。二人とは本人と弘法大師の二人を意味し、常に弘法大師と共にあるの意〕

南原繁という、昔、東大の総長がいらした。それが本当に貧乏だった。やはり四国の方です。

その時、お母さんが南原さんを、子供をおぶりながら、どこか親戚の所へ借金の話をしに行かれる。その時に歩きながら、



「お月さんを見てごらん。お月さんはどこまで行っても一緒に来てくれるでしょ。人は見てなくて誰からも顧みられず見捨てられても、お月さんはいつも一緒にいてくれるだろう」

と言った。それがずっと三つ子の魂に留まっていた。南原さんの著作の中に出てくる。ああいう話は感激します。昔はねんねこで背中におぶってかぶせて寒い所を歩いて行くわけです。「人が見てなくても、天の神さまは見てらっしゃるよ、お月さんは見ていてくれるよ」

とか、そういう魂の語りかけが三歳の時にしみこんで、それがずっと続くそうですね。

今の日本でそういうことがなされているのかどうか、それぞれのご家庭でなされているのかどうか。口を開いたら、

「塾へ行つてらっしゃい!」

と、これでは可哀相ですわ。子供は興味のないものに、無理にやれと言ったって、残酷なんです。興味が湧いたら、何でもやりますよ。待っていてやればいい。

「そんなことしたら、一流の学校へ行けへん!」

「一流なんかならんていいと言ふんや、一流で何やねん、いったい?」

と私は言いたい。根本的に間違っています、日本の価値観は。おそらく神さまから示されないとわからない。仏教の方だかたって本当のことを仰ればいい。どの道の方も、この地上のことではない、地上と別次元の、天の次元からの語りかけ、それを受けとって、それで生きようと。共通項は絶対にあるはずなんです。永遠の生命、愛。搾取さくしゆしない、与える。キリストは、

「受けとるよりも、与える方が幸いだ」

と言われた。人に親切にする。平凡なことです。それを何か難しい宗教に仕立て上げたら、これは間違いです。誰でもが受けとれる、誰でもが歩める道が本当の道です。

そうでしょ。我々、日常の御飯だつて、どなたも御飯をお食べになります。どなたもお水をお飲みになる。どなたも安らぎます。どなたも空気を吸っておられます。無条件でしょ。

「一定の知識がなければだめだ、一定の何々がなければだめだ」

なんていうのは、これは限定されたものです。困るんです。神さまはそんなお方ではありません。幼児おきなごにだつて、三つ子の魂にだつてわかる、直観的にわかる。愛というものと、そうでないものとの違いがわかる。愛の人には、子供はなついていきます。そうでない人には、子供は近づきません。動物もそうです。動物を好きな人は、犬が人に吠ほえると、

「あれは悪い人だ」

なんて言うんです、

「いい人には絶対に吠えない。噛みつかれたら噛みつかれた人が悪い」

くらいに思っているでしょ(笑)。あれは困りますけれども。そういう嗅覚というのかな、直

感というのかな、そういうのが人間に備わっているはずですが、欲があればだめです、だま騙され
ます。欲がなければ、本ものと偽者にせものの見分けがつかずはずです。
味わつてもらいたい。こつをつかまえてもらいたい。それでいい。こつは何か。「無条件」
です。

「**砕けの魂、心砕けた者は幸いだ**」

という。幼児おとこの魂。そして、心開けない人は、「開いてください」というお願いを持つていく。

「私は砕けないので、砕いてください」

というお願いを持つていく。渴いている時は、水がほしいですものね。渴いていたら、絶対
にほしい。

「ほしいんです、智慧をほしいんです!」

と云えばいい。福音書でキリストに出会っている人はみな平凡な人ですよ。

「**永遠の生命の水が湧き出る**」

なんて言われたあのサマリアの女なんて、身持ちがわるくて、昼の12時頃にのこのこ、バケ
ツをひっさげてやって来た。イエスは井戸端で休んでおられた。そして、

「ちよつとすまんけど、水を飲ませてくれんかね」

と言われた。

「あなたはユダヤ人でしょ、私はサマリア人や。喧嘩している間柄ではありま
せんか。それなのに、言葉をかけてくれたんやね!」

と言う。そしたら、イエスさまは、

「私は何者か、私の正体を知ったら、あなたの方から水をくれと言い出すはず
だよ」

「何言ってるの、この井戸は深い。素手でどないして水汲み上げるんや!」

「いや、この井戸の水を飲む者はまた渴く。けれども、私から流れてくる水は
永遠に渴かない。無限に溢れ出るよ」

「そんな水をくださいよ!」

と言いだした。

「あなたは、五人も夫がおったが、今の夫はまた別の人やろ」

「あなたは預言者や!」

と言つて、すつとんで行つた。そして町の人を連れてきた。すつとんで行く前に、その女は
かなり知識がありますね、

「ユダヤ人のだんなさん、あなた方はエルサレムで礼拝すると言っているが、
我々はこのゲリジムという山で礼拝する。どっちが本まなの?」

と聞いた。そしたら、



「この山でもあの山でもない。霊と真^{まこと}をもって拝する。神さまを拝するのに、この山だとかお寺とか教会とか、限定はない。神は霊である。霊なる神さまを礼拝するというのは、霊と真^{まこと}をもって神さまを拝する。これが本当の礼拝だ。そういう人たちを神さまは求めておられるんだよ」

「ほう、あなたは預言者だ、すごい!」

「いや、私がそれだよ」

と言われたのに、その女の人は水瓶を置いたまますつとんで行って、

「えらい人に出会ったよ、これはひよつとしたら、預言者かもしれない」

と。「ひよつとしたら預言者」どころか、キリストなんですもの。町の人がぞろぞろやって来た。そして、イエスに、

「ぜひ、自分たちの所へ来て欲しい」

と町の人たちが頼む。二日間、その村にお泊まりになった。そのあとの結末はどうかというと、サマリアの女に、

「初めは、あなたが言ったから聞いた。けれども、もう今はあなたは関係ない。」

私たちはじかじかにこの方からお話を聞いた。これは本ものだと思った」

と、そう言っただけで告白している。ヨハネ伝の第4章——ニコデモさんの次のところですよ——こういう世界です。何も知らなかった人が、二日間、イエスからじかじかに話を聞いて受け入れた、信じた。ユダヤ人は信じない。ユダヤ人は、サマリアなんて異教徒と結婚して混血になった。だから、排除した。ユダヤの血統ではないとだめだと。肉、血統を重んじた。イエスさまはそんなことは問題になさらない。混血であろうが何であろうが、

「^{まこと}霊と真^{まこと}をもって拝する」

これでいい。ユダヤ人、異邦人であろうと何であろうと、そんなことは関係ない。みんな神の子ではないか。霊と真^{まこと}をもって拝する。場所の限定もなければ、何の限定もない。「霊と真^{まこと}をもって拝せよ」と、それだけでいい。そういう無条件の世界です。そして、心を開いてくれる。

どうぞ、皆さん、今日をきっかけにして先入観をぬきにして、わからんところはすつ飛ばされて、楽しい好い言葉だけを拾い出して、それを噛みしめる。スルメというのは噛みしめると味が出てくる。昆布もそうです、噛みしめると味が出てくる。噛みしめ噛みしめ、味が出てくる。それを血肉とする。そういう角度から読む。

私は、ヨハネ伝からお読みになればいいと思う。それから今度は、ルカ伝に行きます。それからマタイ伝に行く。マタイ伝はユダヤ的な要素がかなり入り込んでいますから、我々にしつくりこない所がたくさんあります。旧約聖書なんかはますますしつくりしない所がたくさんあります。けれども、さっきのイザヤ書とかミカ書とか、素晴らしい所があるでしょ。



掘り出しものがありますから、その掘り出しものを旧約聖書から掘り出していく。

そして、新約聖書がピカリと光っていますから、その中の——マタイ伝なんかのユダヤ的要素が強い所はカットしていい——本ものだけを食べて、咀嚼そしゃくしていく。そして、皆さん自身が本ものに化せられていく。化体かたいされていく。神さまの御霊みたま、御言みことば、生命いのち、それが化体して化合物になっていく。もう分離しなくなる。どの部分がイエスさまで、どの部分が奥田かわからなくなるくらいに一つになる。

恋愛もそんなもんですか。「私のものはあなたのもの、あなたのものは私のもの」と。「あなたのもは私のもの、私のものは私のもの」、これではない。二者一体、それが本当の愛の奥義なんでしょう、なかなか成れませんけれどもね。違う人間が一つになるなんて、土台、無理な話ですよ。無理だけれども、神さま(キリスト)は一つになろうとしてくださっている。そのために出張命令をもらって来てくださったのではないですか。その気持ちを受けとっていく。これが御意みこころなんですよ。それでは、このへんで終わることにいたしましょう。

● 祈り

主イエス・キリストさま、天にいらつしやる父なる神さま、今日は奈良のこの会場におきまして、皆さま方と一緒に、あなたの世界を味わうことができました。天の次元の世界をひっさげて、あなたが下つてきてくださった。本当に心を尽くし、力を尽くし、誠まことを尽くして語り、御業みわざをなさってくださいなのに、当時の人たちはことごとくそれに躓つまずき逆らい、あげくの果ては十字架につけて殺してしまおうという、とんでもないことをやりました。それでも、あなたさまは十字架の上から、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のしていることがわからないからです」

と。そして、弟子たちに対しては、

「必ずお前たちの所へ帰ってくる。そうしたら、もう絶対お前たちを孤兒みなしごにはしない。

一緒に住処すまかを共にするんだ」

と。そして、本当にそのお言葉どおり、あなたは弟子たちの中に住んでくださいました。そして今度は、東洋にいる私たちの中にも、あなたは今、お住みになってくださっております。あなたにとっては、民族の違いなど問題ではありません。地球が一つであるように、あなたはどの民族をも等しく愛し給う。等しく生命を与えようとなさっていらつしやいます。

どうか、全世界の人が目覚めて、宗教争いを止めて、覇権争いを止めて、この次元の違う天の次元、天の生命、永遠の生命、これを無条件に受けとって、お一人お一人が生まれ変わって、神の国の住人として共に手を取り合うことができますように、導いてください。その日まで共に働かせてください。

主イエス・キリストの尊い御名みを通して、この祈りを御前みにお献げいたします。アーメン。

